

各地で話題の病害虫

カキノヒメヨコバイ

学名: *Empoasca nipponica* Dworakowska

本種は1982年に京都産の標本により記載されたがその後カキに対する被害は認められていなかった。ところが、1995年5月に我が国では初めて岐阜県のカキ産地で富有ガキに本種の被害が確認され、1998年7月には静岡県で、同年8月には愛知県でも被害が確認された。

成虫は、体長が2.8~3.2mmで、羽化直後の体色は白っぽいが次第に淡青緑色となる。ふ化直後の幼虫は乳白色、微小で肉眼での判別は困難であるが、最終齢の体長は2mm程度である。若齢幼虫の複眼は赤く、齢が進むと成虫同様白くなる。

寄主植物はカキ、ナシ、リンゴ、ササゲ等が確認されている。



静岡県病害虫防除所 増井伸一氏提供

被害は、成虫及び幼虫が新梢の芽や果実等を吸汁することによるもので、カキでは新梢及び夏期~秋期の徒長枝の芽の生育停止や新葉の周縁が壊死・落葉し、成葉がまだらに退色する。被害が著しい場合は、葉縁の奇形化や落葉、幼果の落果が発生する。また、落葉により2次伸長枝が発生し、翌年着果しないほか樹が枯死する場合もある。果実には、吸汁痕を伴った微小黒点が発生する。

カキでの防除対策は、登録のあるアセタミプリド水溶剤、ピフェントリン水和剤、DMTP水和剤により他の害虫との同時防除が有効である。

イチゴ茎腐細菌病 (仮称)

学名: *Erwinia chrysanthemi* Burkholder, Macfadden and Dimock 1953

1996年11月大分県杵築市のイチゴほ場で、葉及び葉柄部にえそが生じ、がくが褐変する被害が発生した。大分県農業技術センターの調査により、本被害はイチゴでは未記録の *Erwinia chrysanthemi* による病害であると判明した(1997年)。1998年には長崎県でも本病の発生が確認された。

葉や葉柄部に現れる病徴は前述したが、この他に発病株のクラウン部は髓が灰褐色~赤褐色に変色し、後に腐敗・消失して空洞となる。激しい場合は株が枯死する。また、果梗部も髓が腐敗・消失するため空洞化し、激しい場合は果実内部まで空洞化が進行することもある。

イチゴクラウン部への接種試験の結果、本病は



大分県農業技術センター 吉松英明氏提供

高温条件下(30℃)で発生しやすいことが判明した。本細菌のイチゴでの伝染環・発病要因等は現在のところ不明であり、有効な農薬は未だ見あたらない状態である。同種細菌によるナス茎腐細菌病等では被害残さが第一次伝染源となり、付傷部位から感染することが知られている。

防除法は、発生ほ場では必ずマルチを使用し太陽熱による土壤消毒を行うことである。また、被害残さが第一次感染源になると考えられることから、発病株が出たら周辺土壌とともに除去するのが有効である。